

岩手大の野生動物撮影

岩手大農学部(盛岡市)の地域生態管理学研究室では、同大敷地内に設置したカメラで出没する野生動物の様子を撮影し、動画などをウェブ上で公開する「野生動物園」を実施した。昨年6〜12月の約半年に及ぶ撮影期間では、キツネやアナグマなどの姿が捉えられた。研究に関わった学生は「野生動物との関わりについて考えるきっかけにしてほしい」と話している。



「野生動物園」を実施した高橋さん(中央)とサポートした福島さん(右)、原科教授(左)(2月21日、盛岡市の岩手大)

ウェブで公開 人との共存 考える契機に

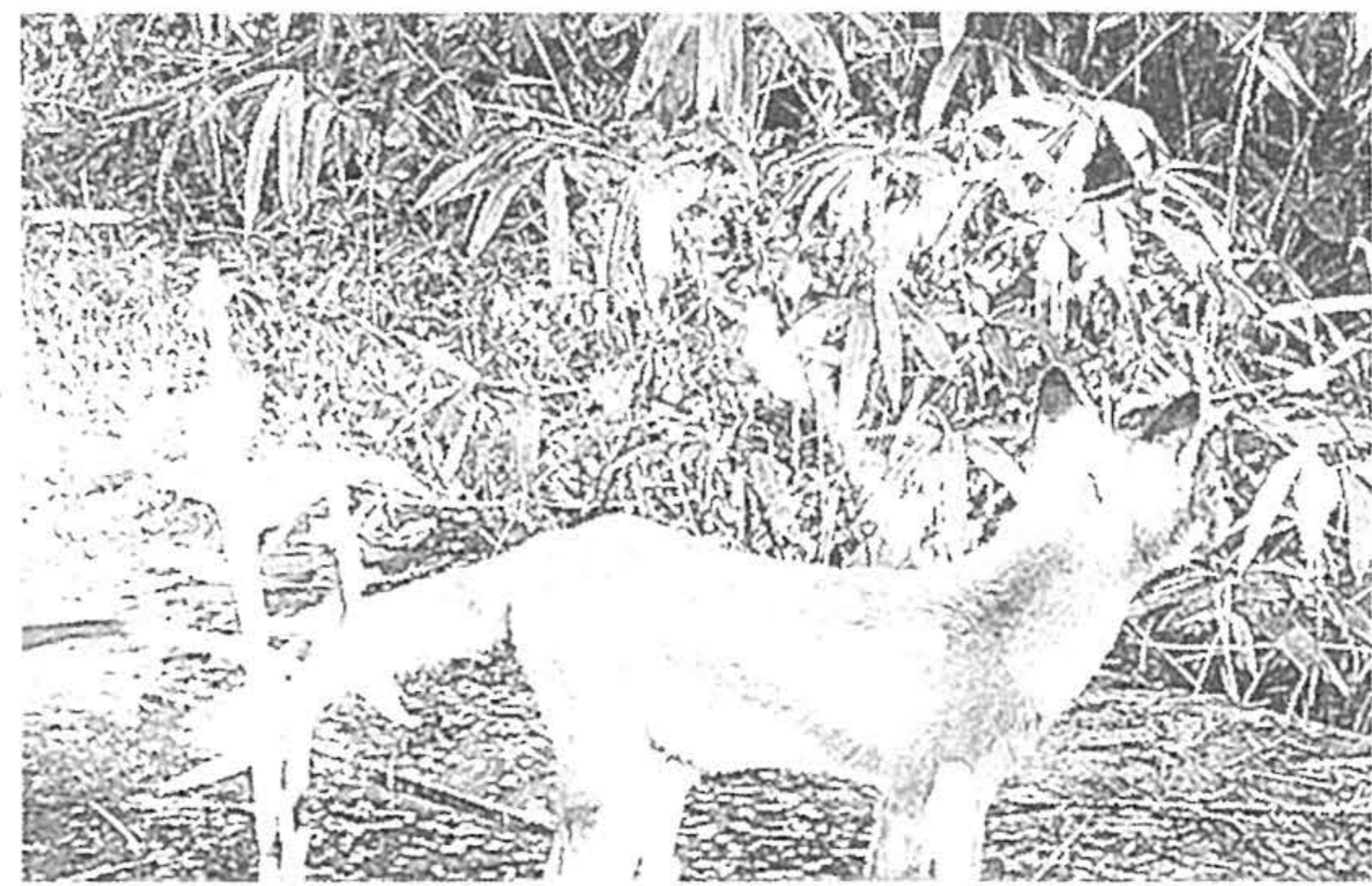


「野生動物園」の期間中に一番多く撮影されたのはキツネで、アナグマ、ハクビシンと続いた。7月にはアライグマの姿も1回カメラに収められた。これらの野生動物は夜行性だが、子連れのアナグマが昼間に出歩く様子も撮影された。撮影した動画などは特設ブログに随時掲載した。

研究は、同研究室の農学部4年高橋莉奈さん(23)が主導。過去に大学構内に出没する野生動物の研究に取り組んだ経験のある大学院生の福島良樹さん(29)がサポートした。

設置したセンサーカメラは計16台で、大学構内でも自然が多い農学部のエリアや畑などに配置。最初はほぼ毎日、高さや角度を変えながらカメラの設置と回収を繰り返した。撮影ポイン

岩手大学構内で撮影された動物たち(いずれも岩手大地域生態管理学研究室提供)



キツネ



シカ



アライグマ



アライグマ

トが定まってからは2週間ほどの周期で回収し、データを記録したり電池を交換したりして撮影を続けた。構内が広いので、すべてのカメラの回収に毎回1時

間ほどを要したという。また、カメラは1台3万円ほどと高価なため、いたずらや盗難に遭わないよう、配置する場所にも気を配った。

様々な動物を撮影できた背景について、同研究室の原科幸爾教授は「岩手大は町中にあるが、北上川や高松の池など自然豊かな場所に近く、野生動物が出没しやすい環境」と説明する。野生動物の中でも、在来種と比べて、外来種は生活環境や農作物への被害をもたらすなどとして近年問題化している。「野生動物園」で撮影されたハクビシンやアライグマは外来種で、盛岡市でも被害への注意が呼びかけられている。ハクビシンは家の屋根裏にすみつき、ため込んだ排せつ物の重さで天井を落としたケースもあったという。

ただ、一般的に在来種と外来種の違いは認知されていない。今回の研究で同大の近隣住民に実施した野生動物への意識調査でも、在来種のアナグマと外来種のアライグマでイメージに大きな差は見られなかった。高橋さんは3月で卒業して就職するため、研究の今は未定というが、「岩手大にこれだけの野生動物が出没することを知らない人もいると思う。今後多くの人に知ってもらい、共存のあり方について考える機会が重要」と考えている。

※読売新聞令和5年3月7日付
 ※この記事は読売新聞社の許諾を得て転載しています。
 ※無断転載・複写を禁じます